

71 V. パレートの論理的実験的科学の方法

莊周 わたしの夢に現われたところをみると、君はまた、わたしと問答をしたがっているようですね。

園丁 ええ、そうです。最近、V. パレートという人の『一般社会学提要』を勉強しました。大部の原著を圧縮して提要にしたもので、たやすく受容できる書き物ではありません。あなたと対話すれば、理解が深まるだろうと期待してのことです。

莊周 世間であまり聞かない昔の人の書物をどうして読む気になったのですか。

園丁 読むべき書物を選ぶのに、僕は、『世界を変えた 100 冊の本』という本を参考にしてきました。その本は、M. S. スミスというイギリスの評論家が、偉大な書物を 100 冊選んで論評したものです。この本を読むまで、パレートという名もその書き物のことも知りませんでした。ところが、スミスは、M. ウェーバーと E. デュルケムと並ぶ現代社会学の創始者の一人だとし、さらに『一般社会学提要』の重要性や影響力は単に社会学にとどまらなないと述べて、100 冊の中でも高い評価を与えているのです。この批評を見て前から気になっていたのですが、やっと、読むゆとりができた、とでも言いましょうか…。

莊周 そうですか。では、その書物を君がどう読んだか聴き

ましよう。

園丁 いつものように、まず、僕がその書物から受けとったことを整理するのにつきあってください。パレートの主張の要点をつかむために、スミスの概説を見てみましょう（意味が通りやすいように文を修正します）。

— 主要な論点は、人間の本質は変化せず、実際には感情に従っていながら、理性に従うふりをしているということ。（彼は）本書において、社会が、それを構成する人間と同様に、理性に従って動くのではないことを証明した。…（それは）人間の非論理的行動が社会システムの基礎を与えるからである。非論理的行動は感情から生まれるのだが、彼は、（感情そのものと区別して）「残基」という概念を導入し、残基は「人間のある種の本能（感情）によって生じるもの」とした。（たとえば）、砂糖を好むことは残基ではないが、砂糖をよいと信じることが残基である。感情は持続するが、残基は変化しやすい。残基の一部は偏見や奇怪なもので（さえある）…。この鋭く精妙な分析は、社会的不合理のみごとな説明になっている。しかし（これで）すべての根本的本能や感情を理解できるわけではない。「われわれに発見できるのは合理化を生み出す本能(感情)だけで、合理化によって隠蔽されない本能に出会うことはない」。

莊周 他人の要約で問答を簡単にしようというのですか。

園丁 いや、そうではありません。簡単に理解するのがむずかしい書物の案内図を見ておこうとしているのです。評者は、「(パレートは) これまで「実証主義」や「科学主義」の信奉者と呼ばれてきたが、これは重大な誤解である。確かに、自著から距離を置き、素材から物理学者と同じ結論を引き出そうと願った。しかし、冒頭で社会学は定義できないと言っているし、著作の全体的精神から見ても彼が実証主義でないことは明らかである」と言います。読んでみて、僕もそう思いました。パレートは大学で数学と物理学を専攻してその方面で博士号まで取得したようだから、その経歴が自然科学に寄り添う姿勢を決定づけたのだと思います。

莊周 ウィトゲンシュタインさんの場合も、大学で工学を学んだことがその哲学に大きな影響を与えました。現代では、人文学や社会学の学者にも自然科学の素養が必要なのでしょう。現代人はたいへんですね。おっと、君はパレートさんの多彩な経歴に興味をもっているようだけど、話を広げて長引かせないでくださいよ。

園丁 はい。でも、著者がどういう人間かを知ることが、書かれた内容を理解するのに役立ちますからね。「書きぶりに皮肉がまじり、感情のかけらも見いだせないが、パレートは怒りや嫌悪や幻滅からまったく自由だった」、とスミスは言います。この注解は、パレートの痛烈な文章を正確

に理解するのに重要だと思います。

読み終わってみて、僕なりにスミスの注解を言い換えると次のようになるでしょう。パレートは、自然科学とその「科学的」で「実証的」な方法を貴重なものと評価しますから、自然科学に属さない事象に対しても、その方法と姿勢を貫きたいのです。しかし、人間と社会に関する事象は自然科学の事象とは異なります。自然科学の研究は事象を貫く法則と呼べるものを見出します。それに対して、人間と社会に関する事象はそんなに単純なものではありません。自然科学を学んだパレートにはよく判っていたことです。そういう事象に対して「実証主義」や「科学主義」を貫き通すことはできません。

莊周 それをわきまえておくことは重要ですね。

園丁 はい。ところが、伝統の人文学や新しく興隆してきた社会科学と呼ばれる学問領域で、それがあいまいにされたまま自然科学に類似する議論がなされました。対象のちがいを弁別できたパレートは、そのやり方を見て痛烈な批判をすることになったのでしょう。そこで、広い意味の社会学を課題として考察するのに、対象を「残基」というような概念を介在させて構造化し、なるべく科学的で論理的な議論に近づけようとしたのだ、と思います。

莊周 おやおや、君はもう結論的なことを言い出しましたよ。この問答に君の言う論理的な流れをつくるのをむずかしくしたのではないですか。

＊

園丁　言われてみればそうですね。いつも僕の議論は、一それが議論と言えるほどのものか怪しいですが一、右往左往するのです。話を組み立てなおしましょう。『一般社会学提要』のテキストに入っていきます。

園丁　第一章序論は、「もっぱら実験的な社会学をば本書で展開しようと思う」と目標を提示し、「経験と観察とを唯一の案内者とする」と方法を明かします。そして、「我々は本質や原理の研究を差し控える」と言明して、「物事の本質や原理を科学と呼ぶ形而上学者」を批判します。パレートの社会学はそのような意味の“科学”ではないのです。代わりに対置するのは論理的実験的科学です。この学は、「多数の事実に通な特性の凝縮した、〈原理〉と呼ばれるある一般的抽象的命題から論理的に引き出された帰結」すなわち「理論」を提出し、「その真理性」は、「原理や理論や推論が事実に従属」していて、「事実をよく表象しているか否か」を基準に判断されます。そこでは、「帰結を求める手段として仮説を用いても」、「常に経験で検証」することによって、「実験的領域を出ることがない」ようにするのです。

これは自然科学の要件を一般的に表現したものになっ

ていますが、論理的実験的科学を自然科学の外にも適用しようとするためにそうされているのです。自然科学の外に出ればよいに、“絶対的な”理論を選び出すことは困難ですから、「過去の事実との相違の度が少なく、将来の事実を最もよく予見せしめ、さらに多数の事実を包含している理論を選ぶ」ことだけが可能なことです。そのとき、理論を無限定にしないように、「命題の証拠を、経験と観察、命題の論理的帰結に求める」とされます。形而上学や宗教は、この論理的実験的科学の限界の外にあるのです。この立場を厳格に貫けば、これまでの人文学や社会学のたいていの言説がどこかしら論理的実験的科学を逸脱していることになるでしょう。勢い、パレートの批判は痛烈にならざるをえません。

莊周　そうですか。そういう眼で厳しく見れば、昔の蝶の思索『莊子』も論理的実験的科学から逸脱したところがあると言われても仕方ありませんね。

園丁　おや、莊周さんにしては達観から降りてきた物言いですね。あなたに代わって言いましょう。『莊子』は、たいてい経験と観察から出てきた言葉を使い、飛躍が多く含まれるけれども、論理の破綻を避けようとしている、と僕は思います。そこには僕の学ぶべきことが数えきれないほど書かれています。これまでの賢人たちの著作はみなそうだと思います。

莊周 それなら、パレートさんの書物はどういう意味をもつのですか。

園丁 僕はこう考えます。自然科学の成功によって、それ以前の学問に足りなかったところが明らかになりました。問題の一端はアプローチの仕方、方法にあったのです。パレートは、それを反省して、着実なやり方で事物・事象を考察することを提唱しているのだと考えます。

園丁 僕たちの対話「認識と言語を巡って」をふりかえってみましょう。カントは、ニュートン力学の成立を契機として、人間の理性をそれまでよりも構造的にとらえて哲学することを提唱しました。その認識論は、理性の運用に限界があることを明らかにし、理性の用い方に指針を与えました。ところが、自然科学の隆盛に対してそれ以前の形而上学的思考の慣性は大きく、目まぐるしく展開する近代の生み出す錯綜がカントの指針を見えづらくしました。ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は、形而上学的言説に警鐘を鳴らし、カントの主旨を突き詰めて体系化したもの、と僕は考えます。

近代の思潮をこのような流れとして見ると、パレートは、時代が前後しますがウィトゲンシュタインが置く限界を超えて、自然科学の外でも確実性の高い命題を語ることができるような方策を探求した、ととらえることが可能だと思います。

莊周 たしかに、わたしは自然科学以外のことを大いに語りたいと思いますね。それはそうですが、君の近代思潮の流れの単純化は、わたしたちが多くを知らないことからくる行き過ぎではないですか。

園丁 僕のすることが貧弱だということは認めます。僕のような者の夢に現われた不運を諦めてください。僕にできるのは、巡っていて出会ったことを思索することです。今日は、出会ったパレートの思想を自分の頭の中で整理し位置づけようとしているのです。力を貸してください。

莊周 君はいつも同じことを言っていますよ……。それで、続きはどうなるのですか。

園丁 自然科学の外というのは人間にかかわることで、あなたの言われるように、人間にとってはそちらの方が関心事です。近代になっての言葉で言えば、人文学や社会学の領域です。パレートが一般社会学と呼ぶのはそういう領域を対象とする学と言えるでしょう。それをできるかぎり厳密な方法で考察するために、パレートは、自然科学の方法を敷衍して、一般社会学を論理的実験的科学として提起しようとした、と僕は位置づけるのです。

莊周 なんとか道筋をつけましたね。しかし、基本的方法をおぼろげに示しただけで、ここまでの問答は構想の段階にとどまっていますよ。

園丁 はい、まだ第一章序論の話をしているだけですから。

園丁 自然科学の外に出ると、人間のなす非論理的な行為が問題になります。第二章は、主観的にも客観的にも手段と目的が論理的に結合している論理的行為から外れる行為を考察します。パレートは、非論理的行為が、主として一定の心的状態、すなわち感情や下等意識から出発することに注目します。そして、数学や自然科学の流儀に倣い、図形を用いて対象を構造的に表現して、考察の手がかりを与えようとしています。そのやり方は方法的なもので、構造化された対象は要素的なものから成りますから、問題は、適切な要素を見出しそれらのあいだの関係として事象を説明できるかということになります。今の場合、仮定した心的状態 A と行為 B に対して、感情の表現 C を配置します。心的状態は見えないものですが、感情の表現（しばしば道徳理論や宗教理論に発展する）は類推できるものです。こういう二次元的な構図を設定すれば関係を質的にも量的にも考察できる、ということです。パレートは、考察しづらい主題を科学的な方法にのせて議論しようとするのです。

パレートの考えでは、感情の表現 C から行為 B を引き出せるとするのは間違いです。行為 B と感情の表現 C は心的状態 A に発するものですから、感情の表現 C から出発して心的状態 A を知り、次にそこから行為 B を導き出すべきなのです。これは困難なことです、その困難を克服しなければ、社会現象の科学的知識は得られない、とパレートは考えます。

莊周 その基本構図がパレートさんの考え方をよく示していると言はれるのです。

園丁 はい。A, B, C 三要素の構図にもう一つ別の行為 D を加えると、もう少し複雑な関係を考察することができます。たとえば、宗教にかかわる心的状態 A に対して、行為 B を礼拝、感情の表現 C を神学とすると、そこから生まれる人間の行為 D を要素間の一定の関係として分析的に考えることができます。

第二節は昔あらわに出現した非論理的行為を題材にして分析が進められますが、重要なのは、人間が非論理的行為をするという認識です。

莊周 でも、昔の賢人はみなそう考えたのではないですか。

園丁 はい、そうですね。ところが、学説史を一見すると、非論理的行為が注目されたように思えない、とパレートは指摘します。第三章はなぜそうなのかを論じます。学者は人間が非論理的行為をすることを認識するけれども、非論理的行為を誤謬に陥らないで留意するのは困難なので、誰もがもつ論理的推論を引き出す傾向に流されるのだ、とパレートは考えます。その部類をすべて挙げて検討し、人間の非論理的行為を背後に隠してしまう理論的な解釈・説明などが登場する事情を明らかにします。

こうして、過去に見られたように、多くの場合、宗教・道徳・法に現われた理論は論理の実験的科学から逸脱する

のです。そこで、第四節の表題は「経験を超越する理論」ということになります。こういう理論は、経験一般もしくは論理的推論によって表わされた特殊の経験に訴えることができません。科学にはあるのに、こういう理論間の論争には経験という裁判官がいないのです。宗教間の論争では感情以外にはないことになるのです。形而上学的原理も、超自然的存在と同じく、それを肯定することも否定することも可能であり（カントの二律背反）、争論のかたをつける裁判官がいないのです。

莊周　今君が言ったのは、第三節と第四節の君なりの解釈ですね。それが正確であるか疑問がありますが、人間と社会についての多くの理論が経験によって検証することが困難な状態にとどまっている、とパレートさんが考えていることはどうも確かなようです。

園丁　ええ、実際にパレートは、「社会的事項に関する現行の理論の大部分は、非実験的実体から成る部類に接近しているのに、実験的理論の形と外見を僭取している」と言いますからね。

＊

園丁　その少し前で、理論に使用されている素材が二種類に分類される、と重要な指摘をしています。理論は、「客観的経験に属し客観的に観察しうる事物、または観察と経験

から論理的に厳密に推論される事物を利用するか」、あるいは「客観的経験と観察に超越する事物を利用するか（ここには、内観とか主観的経験とかに由来するものが含まれている）」の二つがある、ということです。パレートの言う実験的という言葉は前者に対して、非実験的という言葉は後者に使われます。実験的理論というのはこの規定に適合する理論のことを言っているのです。したがって、パレートが分類しながら内容や特徴を対比して構想しようとしている論理の実験的科学は、厳密な推論で構成できる実験的理論をもつ学問ということになるでしょう。

そこでも、直線の組み合わせの図形を用い、理論の要素を記号で表現してそれらのあいだの論理的関係を考察していて、例題としては一般的なものですが、論理の実験的科学の演習をしている感があります。人間と社会のかかわる問題を、自然科学に倣って、要素間の関係としてとらえようとしているのです。新しい方法を開発しようとしていることが分かります。

莊周 わたしを含めて昔の思索者はそういう意識的方法を使いませんでした。近代の科学と人文学と社会学を見てきた二十世紀初頭のパレートさんには、それまでの人文学と社会学のどこに問題があるかがかなり見えてきたということでしょうね。

園丁 どのようにして誤謬が生まれるか一例を見てみまし

よう。事物 A の名称が a、事物 B の名称が b、これに関連する語 X があったとしましょう。

(1) もし、A, X, B が限定された実在の事物であれば、 $A=X$, $X=B$, ゆえに $A=B$ という三段論法は、経験に合致します。

(2) 事物 A の名称 a が、語 X が喚起する感情に等しい感情を惹き起こし、X の喚起する感情が事物 B の名称 b によって喚起された感情に等しかった場合に、ゆえに名称 a が喚起する感情は名称 b が喚起する感情に等しいとする三段論法は、厳密さが減少します。A, X, B が実在的な場合には、(1)に似た経験との合致があるでしょうが、通例、a, X, b はきわめて漠然としか限定されませんから、経験との合致はあまり密接ではないことになります。

(3) (2)の三段論法を敷衍して $A=B$ とするのは問題です。前提の a と b とはちがったものですから、 $A=B$ は論理的価値をもたないのです。この命題が論理的価値をもつためには、A, X, B が実在的ではっきり限定されていて、さらに、観念 a, X, b の合致が事物 A, X, B 間の関係に正確に対応する必要があります。パレートは、形而上学と論理的実験的科学との本質的な差異はちょうどこの点にある、と指摘します。言われてみれば、僕はしょっちゅうこの誤りを犯していることに思い当たります。厳密にこの観点から検査すれば、誤謬を免れない言説が多いのだと考えられます。

論理的実験的見地から言えば、誤謬の原因は次の点にあ

るのです。I. A, X, B が実在的な事物だとしても、今見た言い換えが実験的には容認できない、II. 語 a, X, b は正確にはいかなる事物に対応しているか分からないからです。語に対応する実在的な事物が消滅しても、推論が語 a, X, b だけにに基づいてなされることが、この種の一切の推論を誤らせる最大の原因だ、と指摘します。それに、III. 一定の諸感情と他の諸感情との両立もしくは両者の合致は、まったく精確さを欠いた漠然とした関係だから、「a が喚起する感情は X が喚起する感情と合う」というような命題は、大部分恣意的なものだとします。

また、普通の論理においては、結論は前提から出るのに、感情の論理では、前提が結論から出ることにも注意しなければならぬのです。

莊周　今の話は重要な点を具体的に示していて興味深いですね。しかし、この調子で続けては問答になりませんよ。

園丁　ええ、僕が苦勞していることは分かっています。でももう少し、大事な点を確認しておきたいと思います。これは僕自身のためですが。

パレートは、理論を展開しようとする、多数の強力な主観的・感情的動機が顔を出してくることに注意を促し、誤謬は、論理の実験的領域にしか妥当しない結論を、その領域の外に移すことから生じる、と警告します。実験的世界と非実験的世界とのあいだには何ら共通のものがなく、

片方から他方への推論はできないのです。

論証の性質に応じて理論は二つの型に区別できます。一つは事実の論理的帰結からのみ成り、もう一つの型は何か経験を超越するものを含みます。これを見分ける眼が僕には必要です。なぜなら、社会学の理論や経済学の多くの理論は、これまで、「実験的斉一性に何ものかを加えるか、実験的斉一性を無視する命題」を大いに用いてきたからです。そうした命題を排除しなければならないのです。

莊周　なるほど。

園丁　もう少しがまんして聞いてください。僕が陥りやすい危険がいくつも指摘されています。人間というものはなかなか単なる叙事にとどめることができなくて、そこに説明を加える誘惑にかられます。すると、そこに論理的実験的な基礎をもたないことが入りこむのです。パレートは、事物の本質や事実間の必然的關係を知っている者は幸せだと皮肉を言って、謙虚にただ経験の示す關係のみを求めるべきだと、踏み越しを戒めます。ここはカントの姿勢を引き継いでいるのだと思います。

「説明」とは、説明すべき事実を他の事実に関連させることにすぎません。これは、ウィトゲンシュタインが言っていることと同じで、僕たちが『認識と言語を巡って』で、神経回路系のする論理演算で考えたことに通じます。天体の運動を万有引力を用いて説明すると言うのは、誤りなの

です。ここには「天体の運動は力学の方程式を満足する」という仮説があるだけです。この仮説は、現在までのところ観察によって支持されているので、正しさを失っていないのです。

「事実」というものも、歴史的批判によって吟味し論議される種々の資料を通して知られるのです。自然科学とちがって直接に経験的な吟味のできない社会科学には、留意すべき事情が存在します。事実の数の多いことはけっこうなことですが、数よりも、事実の重要性の方が大切です。よく観察され立派に記述された一個の事実は、ぞんざいに観察され不十分に記述された多数の事実に勝るのです。この警告が当てはまる言説がありますね。

絶対的確実性は実験的科学にも存在しないのですが、たとえば、歴史的事実には確実性の高いものとそうでないものがあることに注意しなければなりません。サラミスの戦いが行なわれたことは確かだと思われませんが、ヘロドトスの記述の詳細が確実とは言えません。一般に、事実の種々の説話をそのまま受け入れると誤謬に陥るでしょう。

莊周 君はどうも自分のために話をしているようだ。

園丁 勘弁してください。教訓的なので具体例を言いました。

主として議論の余地のある事実に基づいて理論を構成するのは誤謬なのです。また、疑う余地のない事実によって支持されるのでない理論をすべて排除するのもいけません。パレートは中庸を勧めます。事実の精査と選択とによ

って慎重に理論を構成し、どんなに妥当な理論でさえなんらかの誤謬で汚れていることを常に心にとどめて、用心深く事実を用いなければいけないのです。

莊周 君はまだこういう話を続けたがっていますね。つきあうので、ちょっと休憩しませんか。

＊

莊周 ぼつぼつ再開していいですよ。

園丁 ありがとうございます。今度は「解釈」に移りましょう。最近僕が考えている歴史解釈に関係するので、省くことができません。「事実の直接の知識というものはきわめてまれにしか得られません」。ですから、解釈は欠くことができないもので、全然解釈を用いないようにしようとするれば、史学や社会学の研究を断念するほかなくなります。どういう解釈を採用するかを究めることは確率の問題になります。つまり蓋然性の問題です。それは経験に基づいて解くほかはありません。

パレートは、多くの場合良好な結果が得られる一つの方法があると言います。それは、ある過去の事実 A があるとき、A を他の事実 B と関係させて、解釈がもっともだと思われる結果に導くか否かを判定するのです。また、一般的に言って未知のものは既知のものによって説明されるべきですから、現在が過去によって説明される以上に、過去

は現在によっていっそうよく説明されることも、知っておくべきことです。

諸々の事実の「類似」に注目し次に検証する方法も、実験的法則を発見するために最も普通に用いられる方法の一つです。ただし、類似には常に恣意的なものが含まれるので、確実な与件を与えるのはやはり観察と経験だけであることに注意しなければいけません。

第四節には従来の言説にあったさまざまな問題点が指摘されていますが、それらは省略しましょう。

莊周 パレートさんは、確実性を増す方法を検討して、論理的実験的科学を確立しようとしているのですね。

園丁 そうだと思います。僕にはここまで抜き書きした諸事項は重要だと思えるのでそうしたのです。意識的にこれらのことを点検すれば、書物に述べられていることの信頼度を測ることができると思います。また、先ほど言ったように自分の考えを組み立てるときに大いに参考になると思います。とくに、文章を書くとき役立つでしょう。ただ、規範が多すぎて憶えているのがむずかしいことが、実行を困難にするのですが。

そう考えてみれば、そういう方法を十分考察して整理したパレートが、過去の言説を検討してみると多くの欠陥が見えたということが理解できます。勢い皮肉な口調になるのが分かります。これまでの多くの著作家たちに、論理的

実験的科学に近づこうとする努力が足りなかった、ということができるでしょう。

莊周 その判定はなかなか厳しいですね。

園丁 そうかもしれませんが、向こう見ずな我流の言い方を続ければ、カントの認識論と批判の方法をよく継承・発展させることが不足していたのだと思います。パレートは、自然科学の外に出ていく方策を求めて、自然科学の方法の適用の仕方を探求したのです。人文学や社会学を厳密な学に近づけるにはそうすることが必要だと考えたのです。その論理的実験的科学の建設はまだ途上にあると言えるでしょう。簡単に表現すれば、自然科学の発展を正しく認識したウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は、自然科学の内側をまとめたものと見なすことができます。それに対して、自然科学の外に位置する社会学に取り組もうとしたパレートには、論理的実験的科学であるための方法を開発することが必要だったのです。

莊周 ああ、やっと初めの方の議論に帰ってきましたね。しかし、論理的実験的科学は自然科学の外の領域を全部扱える段階にまでまだ達していませんね。人間のかかわる問題には一筋縄にいかないことがたくさんあります。パレートさんも簡単にいくと考えていたわけではないでしょう。

園丁 それはそうですね。繰り返しになりますが、パレートは一般社会学を構想・提起して建設しようとしているのだ

と思います。僕は、「残基」という概念の提起もその建設作業と理解します。

人間を研究する人文学でも、心をもつ人間が作り出す社会を研究する社会学でも、論理的実験的科学を建設するのは困難な仕事です。しかも、人間はさらにその先まで考えようとするから、その先にまだ思索の対象が残ることになります。

莊周　すると、自然科学の外に、論理的実験的科学で近づける領域とさらにその外縁があると考えることになりますね。そのように考察の対象領域を構造的にとらえておくことは有効かもしれません。

園丁　あなたからそういう言葉を聞けるとは思いませんでした。園丁の図に乗った考えに同調するのは危険ですよ。

莊周　心配してくれるのですか。君の夢の中にいるので、とくにそういう状態になっています。

莊周　まだ第四章までしか話題にしていますが、続きの問答はしないのですか。

園丁　はあ…。論理的実験的科学の実践はたやすいことではない、と思いました。実際にその方法に則って具体的な課題を考察するときには、パレートでも切れ味の鈍るところがあるように感じました。

莊周　君の最後の言葉はどうでしょうか。議論にはいつも、つけいるところが多かれ少なかれ生じるものですよ。

園丁 そう突っ込まれると…。僕がよく理解できなかったせいかもしれません。

莊周 おや、急に弱気になりましたね。精彩を欠いては、これ以上問答を続けても生産的ではないですよ。

園丁 はい……。では、今日はここで切り上げることにします。僕は、パレートの示す誤謬の種類を知り、論理的実験的科学に近づく方法を勉強することに急でしたね。僕に役立つ方法の方が大事だったわけです。

莊周 せっかく勉強したのだから、その方法を君が実践していくことが大切でしょう。

園丁 そうですね。

どうもおつきあいありがとうございました。

2018 年、6 月